

# ホルス神とセト神の争いの神話と「二つの国の統一」

大 島 一 穂

## 序

古代エジプト王国においては、第一王朝の始まり以来、王はホルス神のタカ (Horusfalken) が、人間として具現化した者であった。何故ならば、王の称号であるホルス名 (Horusname)<sup>①</sup>は、王が地上におけるホルス神 (王宮のホルス神)<sup>②</sup>であることを示すからである。このホルス名は、王宮を表わす建物 (Serkeh srkh)<sup>③</sup>の中に書かれており、そのセレクの上に、ホルス神のタカが描かれているのである。

古代エジプト王国は、上エジプトと下エジプトという、「二つの国」(tawj)の統一により成立した。この統一は、上エジプトのホルス神を信奉する王による、下エジプトの征服により達成されたものである。これにより、王は新しい称号を得ている。

それは、上下エジプト王を示す、ネスウビト名 (nī-swī-t-b-

it)<sup>④</sup>である。本来この称号は、「管と蜂に属する者」(der zur Binse und zur Biene gehörige)を意味しており、後の時代の王名表は、第一王朝の最初の王、メネス (Menes) より、このネスウビト名を用いて書かれているが、同時代の遺物によれば、第一王朝のデン (Den d(w)n)に初めて見出すことができる。<sup>⑤</sup>この称号を構成するニイスウト (nī-swī-t)は、本来、上エジプト王 (管に属する者)を意味するものであり、これより一般に王を意味するネスウ (nsw)が派生した、と考えられている。<sup>⑥</sup>

一方、ビティ (bitj)<sup>⑦</sup>は、より神話的色彩が強いものである。ゼーテ (Sethe)によれば、下エジプトの第五州の首都であるサイス (Sais)の主護神、ネイト女神 (Neith n.t)の神殿、「蜂の家 (hwt bitj)にその語源をもち、下エジプトの赤冠 (rote krone)の本来の名前である、「n.t」と強く結びついたものであった、<sup>⑧</sup>というのである。

このデンの次の王である、アネディブ (Anedjib 'a(n)djib) は、さらに称号と考えられる、ネブウィ (nbw) を用いている。

このネブウィは、二つの旗竿 (Standard) の上にそれぞれとまっている、二羽のタカの姿によって示されるもので、「二人の主」 (Die beiden Herren) を意味すると考えられており、上下エジプトを代表する者として「ホルス神とセト神」をわしている。

しかし、どちらの主もが、ホルス神のタカにより表わされるのは、矛盾ではあるが、おそらく、上エジプトのホルス神による統一という事柄を、強調するものであると考えられよう。

しかし、このアネディブの後継者である、セメルケト (Semerkhet 'smr-kht) は、これを止め、より神話的な称号であるネプティ名 (nbt) を用いている。このネプティは、二柱の女神と呼ばれ、上エジプトのヒエラコンポリス<sup>12</sup> Hierakonpolis (Nkhn) のハゲタカの女神、ネケベト (nkhbt) 女神と、下エジプトのペエ (Pe) の、コブラの女神、ワヂェト (Wadjit) によって表わされるもので、上下エジプトの王冠と結びついた称号である。

このように、第一王朝にあらわれた王の称号を考える時、先の時代の神話や出来事が、色濃く反映されているのを見ることができるのである。

それでは、どのような事柄が王や王権に強く影響を与えて

いるのかを、次に考えていきたいと思います。それは、「ホルス神とセト神の争い」である。これについて、ピラミッドテキスト<sup>13</sup>における、ホルス神とセト神の神話と、「メンフィスの神学」 (Das Denkmal memphitischer Theologie) を用いて、考察を進めたいと思う。

## 一 神話的側面からの考察

### (一) 神話の概観

ホルス神とセト神の争いの原因はエジプトの王座についてであり、この誰が王になるか、という事に関して、神々の法廷がその決断を下すのである。それについては、その相続の正当性が、一番重要な点である。

ピラミッドテキストにおいては、二神は、その肉体的な争いにおいて、ホルス神は目を、セト神は罌丸を失い倒れる (Pyr. 679d cf. 418a, 594a)。そして、ホルス神の目は、天空の東側において、セト神によってにぎられており、神々と王は、まがりくねった水路を、トート神 (Thoth 'djhwfj) の羽の上ののり、目を取り返しに出かけて行く (Pyr. 555a~596c)。そして、目はホルス神の手にもどる (Pyr. 578d, 591b)。又、神々の法廷において、王としてのホルス神が証認めれる (Pyr. 316a—317c)。

一方、「メンフィスの神学」においてに、ゲブ神(Geb)は神々の法廷において、二人の争いを止めさせ、セト神を上エジプト王とし、ホルス神を下エジプト王として、二つの国について和解させた(DnT. 7-9, 10a/b-12a/b)。しかしながら、ホルス神の割当がセト神の割当と同じであったことが、ゲブ神の心に良く思われなかったので、その全部を、彼の嫡子の子であるホルス神に与えた(DnT. 10c-12c cf. 13a/b-18a/b)。こうして、二つの国の統一が為されて二人は和解し、二人は一つになった(DnT. 13c-14c, 15c-16c)。

このように、ピラミッドテキストにおいては、より神話的に、王又は王権の象徴としてのホルス神の目が描かれており、その目の回復によりホルス神がエジプトの王となったことを示している。それに対し、「メンフィスの神学」においては、二つの国の統一とその相続がその中心のテーマであり、これは、王の即位を二つの国の統一の理念において説明したものである。

これらの神話の起源や、その発展に関しては、明らかに先史時代や歴史時代が影響を与えていると考えられる。統一は、上エジプトのホルス神を信奉する王により為されたものであるにもかかわらず、ホルス神が代表するのは下エジプトであり、上エジプトは、セト神により代表されている。それでは、王権と強く結びついたこの二神は、本来それぞれの地に帰するのであろうか。

この二神を形容する名前として、ホルス神については「ベヘトの者」(der von Bhd), 又セト神については「オンボスの者」(der von Ombos Nbt)という表現がある。この内オンボスは、明らかに上エジプトの第五州であるが、ベヘトは中王国以後、エドフ(Edfu)を示す地名として用いられているだけである。このベヘトが本来何処であったかについては、本来は下エジプトにあり、後に上エジプトのエドフへ移ったという説と、もともとエドフであったとする説とに大きく分かれている。

前者はゼーテにより、後者は、ケース(Kees)により代表されている。<sup>⑤</sup>この二人の説は、その思考方法においても対照的である。

ゼーテは、広範囲にわたる歴史時代の宗教的テキストや描写を、先史時代の政治的な状況に反映させようとした。それで時には、宗教的な現象に対する政治的原因を求めすぎる傾向が、ややもするとあるように思われる。それに対し、ケースは、ホルス神とセト神は対をなす一組の神々と考え、その一対としての機能は、エジプトのもつ二元性(dualism)の概念を意図したものであり、その上、ホルス神の神話は、一般に、歴史的に見るのではなく、自然神話(Naturmythen)としての、時を超えた経験を含んでいると考え、神話的な思弁をして、政治的な状況の合法性について考えようとしている。

## (二) ホルス神の目

それでは、これらの事をふまえながら、次にホルス神の目について考えていきたい。

この目のもつ役割は、大きく次の四つに分けることができる。<sup>⑭</sup>

- (1) 王権の継続を確実にするものとして、つまり、目は王の権力の象徴であり、それを所有することは、エジプトを所有するのに等しい。
- (2) 供物として、神々、王、そして死者の生命を安全にするもの。

- (3) 太陽神の生命を安全にするもの。

- (4) 御守りや魔除けとして、日常生活における生命を安全にするもの。

これらの内で、ホルス神とセト神の争いの目的となつたのは、まさに(1)の役割である。これに加えて、その目の喪失、又は損傷は、セト神の罽丸の損失と深く結びついており、王の肉体的な終り(つまり、現世における王の死)を意味する。同様に、セト神の罽丸は、生命と生殖力を象徴するものであり、それを失うことは、王の肉体的な終りを意味している。<sup>⑮</sup>

そして、目の奪回は、継承者による即位を意味しており、目をもつことが、エジプトの実質的な継承の確証となる

のである。

ピラミッドテキストにおいて、セト神がホルス神の目を食べることが述べられており(Pyr. 91a, 88c)、又ウナス王(Una<sup>⑯</sup>)が赤い冠を食べ、パピルス色をした(緑色の)冠を呑み込んだことが述べられている(Pyr. 410a)。これらのことから、王権を象徴するホルス神の目は、王権というその意味において、王冠と同一視されるのである。同様に、セト神がおさえているホルス神の目は、時には、緑色の目(Jr Hr wadit)であり、又時には、白色の目(Jr Hr hdi)であることが述べられている(Pyr. 48a-1)<sup>⑰</sup>。そして、パピルス色の王冠が、上エジプトの白い王冠の対をなすものを意図して用いられている(Pyr. 1374b, 1459a)<sup>⑱</sup>。ケースは、waditは、dshrtのための初期の名前であり、コブラ女神、ワデット(wadit)を意図したもので、ワデット女神の冠の意味に用いられたと考えているのである。

一方、ゼーテによれば、下エジプトの王冠の本来の名前は、「蜂の家」と関連をもつネト(n<sup>⑲</sup>)であり、そしてしばしば、赤い冠とも呼ばれたものであった。<sup>⑳</sup>又、waditは、緑色と同様に、赤色にも関係しており、赤い冠が、緑色の冠に取って代つたと考えているのである。

ここまで、ホルス神とセト神の争いについて、ピラミッドテキストを資料に、その争いの目的であった、王権を象徴するホルス神の目を中心に考えてきた。それでは次に、即位の

正当性がその主題である、「メンフィスの神学」を資料に、二神の争いを見ていきたいと考える。

### (三) 「メンフィスの神学」

前にも少しふれたように、ゲブ神は、セト神を彼が生まれた所において、上エジプトとし、ホルス神を、彼の父が溺れさせられた所(その場所は、「二つの国の中央」*Pshyt-tawy*)であるが)において、下エジプト王とした。そして、「二神は和解したのである(DmT. 7-9, 10a/b-12a/b)。

これは、何故、上エジプトを代表する者が、セト神であるか、又、下エジプトを代表する者が、ホルス神であるかの説明と考えることができる。この内、セト神の上エジプト起源は明白である。

しかし、その割当について、ゲブ神は満足しなかったので、全部をホルス神へと与えた(DmT. 10c-12c)。これは、王権の長子相続の原理を説明したものであり、次に(DmT. 13a/b-18a/c)、その即位の儀式が描かれている。ここでは、ホルス神はまず、ウトウ・ジツカル(wt. w Sab)と呼ばれる。この呼名は、後に現われるジャツカル神ウプウアウト神(wp-wawt「道を開く者」と結びついたものであるが、ゼーテによれば、ウトウ・ジャツカルは、「最初」の息子のジャツカルを意味するものであり、よって、長子としての相続人を意味

している。そして、その相続者は、上エジプトのジャツカルであることが示される。その者は、「胎を開く者」(つまり嫡子、*Offener des Leibes*)であり、その名は、ウプウアウト神であることが知らされる。そして、この者が、長子として生まれた息子であり、ウプウアウト神の誕生日に生まれたことが明らかにされる。

この即位の儀式により、ホルス神の頭の上に、二人の魔法使いとしての上下エジプトの王冠が生じ、ホルス神は、上下エジプトの王として現われ、「二つの国の統一」(*Smatawy*)が、達成されるのである。そして次に(DmT. 15c-16c)、和解し、そして一つになったホルス神とセト神が、膏とパピルスにより象徴されている。これは明らかに、「二つの国の統一」<sup>⑤</sup>の象徴の図の原型をなすものと見なすことができる。

### (四) 即位と「二つの国の統一」

「メンフィスの神学」におけるホルス神とセト神の争いについて、統一の理念に基づいた即位の儀式の様子を見てきたが、さらに歴史的な上下エジプトの統一の時代の遺物を加えて、考え合いたいと思う。

それらは、ネセリ王の棍棒頭(The Mace-head of the Scorpion King)、ナルメル王の棍棒頭(The Mace-head of Narmer)<sup>⑥</sup>、そして、同王のパレット(The Palette of Narmer) <sup>⑦</sup>である。

これらの遺物に共通するものは、四人の従者達により、か  
げられている旗竿である。さそり王の棍棒頭においては、  
それらは、上エジプトの白冠をつけた王の前に描かれており、  
ナルメル王の棍棒頭については、下エジプトの赤冠をつけた  
王の右前上の欄に、そして同王のパレットでは、同じく赤冠  
をつけた王の前にそれぞれ描かれている（但し、さそり王の場  
合、その破損により、四つの内二つしか見出すことはできないが、  
おそらく、同じく四つが描かれていたと考えられる）。そして、こ  
れらの遺物に描かれた場面は、その王冠が表わす王権をその  
王が所有していることを示す儀式、つまり、即位ないしは、  
王権の更新の儀式を表わしていると考えられるものである。

この四つの旗竿の上に置かれているものは、ホルス神のタ  
カの姿が二つとウプウァウト神、そして最後の一つは、不明  
な象徴、あるいは、アビドスの呪物（The fetish of Abydos）、  
又は、胎盤<sup>②</sup>を表わしていると考えられるものである。これら  
四つ旗竿は、おそらく、単に、王の軍隊を構成する州もしく  
は、人々を示すものではない。何故なら、四番目の旗竿の上  
に置かれた象徴が示すであろう州もしくは人々を、エジプト  
の歴史において、我々は、容易に見い出すことができないか  
らである。

それでは、この四つの旗竿が表わすものは一体何であらう  
か。それは、統一と即位の神話的な説明であると考えられる。  
「メンフィスの神学」に表わされているホルス神とセト神の

争いは、まさに、これを説明しているにちがいないであらう。  
タカをその上に置いた二つの旗竿は、アネディブ王が用い  
た称号、ネブイと結びついたもので、同時に、第一王朝の王  
妃の称号である「ホルス神とセト神を見る者」<sup>③</sup>（mat Hr St-  
s）とも結びついている。これらは、「二人の主」として、  
二つの国の関係について和解した二神を示すものであり、そ  
して統一後の第一王朝においては、王の内に一つになった  
（王に内在する）ホルス神とセト神を見る者（次の王を生む者）と  
して、王妃の称号に取り入れられたと考えられる。

ウプウァウト神の隠かれた旗竿は、明らかに「胎を開く者」  
であるウトウ・ジャッカルとして、又、上エジプトのジャッ  
カルとしてのゲブ神の遺産相続人である。

そして、問題の旗竿であるが、おそらくその上に置かれて  
いるものは、グリフィスが言うように、胎盤であると考えら  
れる。そこに意図されているのは、後産（しつばのように見え  
るのは、おそらく、へその緒を表わしていると思われる）であり、  
ウプウァウト神の誕生の日に生まれた息子、つまり「胎を開  
く者」であることを証明する神性、あるいは、証拠としてか  
げられているのである。

## 二 歴史的側面からの考察

### (一) ホルス神の起源

バウムガーテルによれば、<sup>⑤</sup>ホルス神のタカとして、間違はなくみなし得る最も古いそれはナカダⅡ文化(Nakada II)に属する、旗竿の上のタカの姿であり、一方、セト神に関しては、ナカダⅠ文化(Nakada I)に属するマハスナ(Mahasna)において、セト神を表わす獣(Seh-animal)の姿が見つっている。しかし、ナカダⅡ文化においては、セト神の姿は見ることができない。

これらの事柄により、バウムガーテルは、ホルス神とセト神の争いの神話は、上エジプトにおける争いの時代にさかのぼるというケースの理論に従い、この二神の争いは、ナカダⅡ文化の人々の特別な神であったホルス神によって象徴されるこの文化の人々により為された、セト神の町である Nubet (オンボス)の征服に、その起源をもつと考えているのである。これは、非常に魅力的な見解である。ケースの言う、対をなす神としてのホルス神とセト神は、王の称号である「二人の主」や二つのホルス神のタカが置かれた旗竿についても、十分な合法性を持っている。しかしながら、まだもう一つ十分説明し得ない点が残されている。それは、何故ホルス神が

下エジプトを代表するか、という問題である。もし、この神話の中の争いが、その二神の起源をも含めて上エジプトに限られるのならば、その勝利者であるホルス神が下エジプトを代表する必要があるであらうか。これについて、ガーディナーの助けを借りながら、この点を考察したいと思う。

彼は、大筋において、ホルス神を下エジプト起源とする、ゼーテの立場に立つており、次のように指摘している。

最も古い時代から、ベヘデトのホルス神が、下エジプトを代表する神として、上エジプトを代表するオンボスのセト神と対比させられているのは、本来のベヘデトが北(下ジプト)に置かれていたからである。

たとえば、ベヘデトのホルス神が、非常に古い時代にエドフにおいて信奉されていたとしても、ベヘデトが最初にデュバ(Djba「エドフ」)のもう一つの名前としてあらわれたのは、単に第十二王朝の終りにおいてである。

少なくとも、エドフのあるテキストが、ベヘデトを、サムベヘデト(Samhehet 'Sma-Bhet)第十七番目の下エジプトの州、つまり、小ディオスポリス(Diospolis Inferior)と同一であることを指摘する時、ダマンフル(Damanhur 'Dmjt-a-Hr)に下エジプトのベヘデトを置くにおいて、ゼーテが正しいかどうか疑いをもつ。

そして、ホルス神が、下エジプト起源である理由として、次のように結んでいる。

「ベヘドトの者」という、この名前はホルス神の北(下エジプト)の起源を主張するために、そして「Nbt」つまり「オンボスの者」と対をなす名前を与えるために、国家神であるホルス神の形容名(the epithet)として用いられたものである。又、ホルス神と結びつく都市であるペエやネケンほど頻繁ではないにしても、オンボスが時たま述べられている一方、何故ベヘドトがピラミッドテキストにおいて、決して述べられていないかという事を、ホルス神の下エジプト起源が説明するであろう。

## (二) むすび

これまで考察してきた「ホルス神とセト神の争い」の神話には、明らかに、先史時代及び二つの国の統一の時代の出来事が色濃く反映されていた。それではここに、神話に反映された事柄を、エジプトの統一の歴史にそいながら再構成を試みたいと思う。

セト神がナカダⅠ文化に見いだされるのに対し、ホルス神が、ナカダⅡ文化以前には、確証をもって見い出せないということは、ガーディナーの言うように、本来ベヘドトは下エジプトにあり、下エジプト起源のホルス神が南の上エジプトへと浸透していったことを示すと考えられる。これが、ホルス神が下エジプトを代表する原因である。しかしながら、ベ

ヘドトが何処にあったか、又、ゼーテ、もしくはガーディナーの言う通りであったかどうかについては、今後の発掘と研究によらねばならない。

おそらく、ナカダⅠ文化の終りの時代までには、上エジプトにおける、はなれた信仰地において、ホルス神はセト神と同等の力を持つまでに至った。そして、引き続きホルス神の南への信仰の浸透にともないながら、ホルス神の信奉者、おそらくナカダⅡ文化の人々によるオンボスの征服が為された。が同時に、二神は和解し、上エジプトは、ホルス神の信奉者(Shuwa It)<sup>⑤</sup>の下に統一された。この和解による統一は、エジプト人のもつ保守(持)性と無関係ではない。エジプトの宗教の流れにおいては、新たに他の神が重要となった時、人々は以前の神を捨て去るのではなく、「古い神を新しい神のもう一つの形態とみなしたり、又は、その神の一つの姿、あるいは、その他の様相であると考えた」<sup>⑥</sup>のである。このような保守性が、統一に関して、二者が和解し一つになるという概念を生み出したと考えられる。このようにして、ホルス神とセト神は、「二人の主」として、王の内に一つになったのである。又、ホルス神が、セト神に優る理由なのである。

そうして、古代エジプト王国は、ホルス神の下に統一された上エジプトによる下エジプトの征服において、「二つの国の統一」が為されたことにより、その第一王朝を迎えたのである。おそらく、軍事上の征服は、「さそり王の棍棒頭」が



示すように、その大半がさそり王により為されたと思われる。そして、次のナルメル王により、その統一が完成されたと考えられるのである。

前に述べたこの両王の遺物に現われる、四つの旗竿に表象される事柄、それは前に「メンフィスの神学」により説明したが、*ホルク*の統一の理念に基づき、王としての即位であり、*ホルク*、上エジプト王としての即位の儀礼（上エジプトにおける和解による統一）より成たられたに違いない。そして、それが上エジプト王の即位に関して用いられる時、この二神の起源が、ホルス神を下エジプトを代表する者として、*ホルク*神を上エジプトを代表する者としたのである。

- 註① この称号は、先王朝時代の王である「*ホルク*王」(Hr srg) などの碑文の例を参照。Beckerath, J.v., in *Lexikon der Ägyptologie* [N-LÄ], (Wiesbaden, 1982), Bd. III, S. 540.
- ② Barta, W., in *MDAIK* 24 (1969) PP. 51-57
- ③ Hieroglyph の 翻字 (transliteration) は、アルファベット以外の記号が用いられる。これは、アルファベットの組合せ等により表記される。
- ④ Erman, A. und Grapow, H. *Wörterbuch der Aegyptischen Sprache* [N-LÄ], Neudruck (Berlin, 1982), Bd. II, S. 330.
- ⑤ Beckerath, J.v., in *LÄ*, Bd. III, S. 540.
- ⑥ Wb, Bd. II, S. 329.
- ⑦ Wb, Bd. I, S. 435.

- ⑧ Wb, Bd. II, S. 198.
- ⑨ Sethe, K., *Urgeschichte und älteste Religion der Ägypter* [N-LÄ-Urges.], (Leipzig, 1930), § 81. ff.

- ⑩ Sethe, K., *Beiträge zur ältesten Geschichte Ägyptens*, (Leipzig, 1906) S. 25, S. 31.
- ⑪ Wb, Bd. II, S. 233 Beckerath, J.v., in *LÄ*, Bd. III, S. 540
- ⑫ Sethe, K., *Die altägyptischen Pyramidentexte*, 4Bde, [N-LÄ-Pyr] (Leipzig, 1922)

# Übersetzung und Kommentar zu den

- altägyptischen Pyramidentexten. 6Bde (Hamburg 1932)
- ⑬ Sethe, K., 'Das Denkmal memphitischer Theologie' in *Dramatische Texte zu altägyptischen Mysterienspielen*, [N-LÄ-DmT.] (Leipzig, 1928)
- ⑭ Gardiner, A.H., in *JEA* 30 (1944) pp23-60
- ⑮ Sethe, K., *Urges.*
- ⑯ Kees, H., 'Horus und Seth als Götter paar' in *MVAeG Bd XXVIII*, Bd XXIX (Leipzig, 1923-1924)
- ⑰ Wb, Bd. I, S. 107.
- ⑱ Westendorf, W., in *LÄ*, Bd. III SS 48-51
- ⑲ Westendorf, W., in *ZÄS* 92 (1966) S. 129.
- ⑳ 第五王朝の最後の王、*ウネフ*、*メンフィス*を初めて用いた王。三人称はウネフ王である。
- ㉑ Wb, Bd. I, S.107
- ㉒ Kees, H., *Farbensymbolik in ägyptischen religiösen Text-*

39 Cerny, J. *Ancient Egyptian Religion* p. 39.

\_\_\_\_\_